

1 「絵本の里けんぶちVIVAマルシェ」【剣淵町】



剣淵町に住む若手農家の有志が、「つくるひと」と「食べるひと」が出会い、笑顔になれる場づくりを目的に、軽トラックに自らが作った野菜を載せて販売しています。



「おいしい」とか「ありがとう」
って言われると
すごく刺激になります。
農家って
ほめられることがないから。

代表者 高橋 朋一さん



Q：はじめたきっかけは？

A：農家の若手がお互いに学びながら活動しているのに、周囲から認めてもらえない状況を変えていきたいと思って。特に自分は農業をやるためにUターンしてきたので、何か新しいことに挑戦してみたいと。

Q：なぜ「軽トラマルシェ」？

A：単純な理由で、お金がなかったから。軽トラはどの家にもあったし、以前から軽トラ市は各地でやられていたので、自分たちの若さを生かして、おしゃれにかっこよくやりたいと思ってこのネーミングにしました。

Q：実際に始めてみてどうでしたか？

A：最初の頃は、どこにでもあるタマネギやジャガイモを売っていたんです。でも、あまり利益に

つながらなくて。何とか特色を出そうとお客さんの声を参考に考えて、なかなか市場に出回らないものを扱う現在の少量多品種のスタイルに行き着きました。3年目くらいから400品種を扱うようになりました。

Q：400種類も？

A：実はこの町には農業関係の特産品がなかったんです。剣淵町は何でも作ることができるので特産品が育たなかった。だったら、何でもある町にしようということで、あえてたくさん品種を揃えることにしました。

Q：活動を進めていく中で、何か変わったことはありますか？

A：みんなの意識が変わりましたね。「美味しかったよ」「ありがとう」ってたくさん声をかけてもらえて。農家は作物を作って出荷するだけでいいから、あまり人と関わらなくてもできるんです。みんな、ほめられたことがないから、とても刺激になって、さらに新しいことに挑戦しようという意欲が高くなってきましたね。

Q：これからの抱負は？

A：お互いの長所を生かして地域全体にメリットのある農業を展開していきたいです。人づくりに力を入れて、みんなの意識を高めていけるように。それと、子供たちの食育に農家が直接関わるような、小さな町だからできることにも取り組んでみたいですね。

インタビューを終えて（生涯学習課：阿部 隆之）

家族一緒の時間を大切にしたいと実家の農業で働くためにUターンしてきた高橋さん。最初の頃はなかなか軌道に乗らず農業経営の危機にも遭遇。そんなとき、息子の「父ちゃんのイモ、おいしい！」という言葉が励みになったと振り返っていました。自分の作ったものに対する手応えを得る喜びがこの取り組みの原点になっているのだと感じました。いろいろなことが分業化し顔の見えない社会が広がる今日だからこそ、こうしたリアルな関わりを大切にしたい取組が地域づくりのヒントになるのではないのでしょうか。

詳しくはこちら

